④「愛」について［これは「ハート」の特質の一つである愛についての探求（三一二頁）のための参考資料である――編集者］

Q　「愛」について考える時、私が思い出す話があります。それは聖書の中に出てくる「善きサマリア人」の譬え話です。哲学者の西谷啓治氏と宗教学者の八木誠一氏は、この話を、『直接経験』の中の「愛」についての考察のための恰好の材料として取り上げ、印象的な問答を繰り広げています。この対話は、D教授の「愛」についての考察の最後に述べられている「愛」の直接性と、完全に重なり合っていると思います。

I　この有名な「善きサマリア人」の譬え話は、律法学者とイエスの発想の違いが見事に現れ出ている話としても象徴的なものですね。

Q　あるユダヤ人がエルサレムからエリコへ行く途中で強盗に襲われます。そして身ぐるみ剥がれて半殺しにされて倒れていると、そこに祭司が通りかかって見つけるものの、よけてそこを通り過ぎてしまう。

I　それから確かレビ人――これは下級の祭司ですね――も見つけますが、やはりそこを同じように通り過ぎてしまう。

Q　ええ。ところが三番目に、ユダヤ人とは敵対関係にあるサマリア人が通りかかったんですね。

I　そのサマリア人が倒れているユダヤ人を見て、かわいそうと思って助けたわけですね。

Q　ええ。八木氏が注目するのは、この譬え話をイエスがして、では一体、この倒れていた人にとって、誰が隣人になったかと思うかと律法学者に尋ねる場面です。すると、律法学者は「それは慈悲深い行いをした人です」と答える。するとイエスは、「あなたも行ってそのようにしなさい」と言ったわけです。

I　隣人とは誰のことかという定義はせずに、譬え話によって「あなたも行ってそのようにしなさい」と言ったという結末になるわけです。

Q　そうです。八木氏はこの譬え話には非常におもしろいことが二つ指摘できると言います。一つは、律法学者にとって、その発想の根拠は、律法に命じられているので自分はこれこれを行うのであって、命じられてい

なければしないということ。これは決して直接性ではないと。

I　われわれの話の文脈で言うと、表面的な精神の段階での対応と言えそうですね。

Q　ええ。これに対してイエスはそこに倒れていることそのことが重要なのであって、その人が敵であろうとなかろうとそんなことは問題じゃない、律法に書いてあろうがなかろうが、とにかくかわいそうだから助けた、そのかわいそうに思った相手がたまたま敵であったという状況なのですね。

I　ここにはまさに直接性があるわけです。

Q　イエスの意味で言えば、サマリア人の行為は愛の行為であり、まず愛があって隣人が成り立つわけで、律法学者のようにまず隣人の定義があって愛が成り立つのではないということですね。

I　八木氏が指摘する二つ目は何だったのですか？

Q　直接性にかかわることではありますが、「かわいそうに思って助けた」というのは、自発的に愛がわき起こってきたためであるということですね。八木氏は、この譬え話がおもしろいのは、神が登場せず、人間的な出来事で完結していると指摘しています。

I　聖書の中の話ですから、結果的には神の愛を証しているとは思いますが。

Q　西谷氏はこの二つ目の視点にからんで、自分が自分を愛する「ごとく」隣人を愛する、西田幾多郎式に言えば、他と自己という本来は異質なものが一体化する事態、「絶対矛盾の自己同一」がサマリア人とユダヤ人との間で発生していると述べています。この発言は印象的でした。

I　「愛」についての考察を一応終えるに当たって、「祖国愛」と「人間愛」の問題について、触れておきたいと思います。

Q　祖国愛は換言すればナショナリズムであり、一方、人間愛は広く国境を越えた愛という形で一応捉えることができますね。

I　ナショナリズムと人間愛の関係は人類永遠の課題でしょうが、宇宙船地球号に乗っている六十七億の人間同士の和合をもたらすという目標に向かっていく上で、両者は現状では折り合いがつかなくなっています。

昨年十五年にわたる考究の末に完成した、社会学者の大澤真幸氏の大著『ナショナリズムの由来』の帯には、「人類最後の難問　ナショナリズムを解く！」と大きな文字で記されています。この本の結びの一節に私は目がとまりました。それは「愛は、ナショナリズムを結節するような閉鎖性を脱し、普遍的な社会空間を準備するような無限に開放的な形式へと転換するはずだ」というものです。

Q　その本についての記事は私も新聞紙上に掲載されていたので読みました。確か八〇〇頁を超える浩瀚（こうかん）な書物であるとのこと、しかも十五年という長い年月をかけて遂に完成したわけですね。学者としての真摯な姿勢を感じました。（読売新聞二〇〇七年十一月七日掲載）

I　あの記事には大澤氏がこの本をしたためた思いがよく表現されていましたので、インタビューの終わり部分を紹介しましょう。

「誰かを深く愛せば、相対的に他の人には無関心となってしまう。それはナショナリズムと同様に『狭量』と言われるかもしれないが、多文化主義のように『すべての人を愛す』という方が、よほどうさんくさい。その両側を横断する何かを見つけ、制度としていくことが、これからの課題でしょう」と大澤氏は述べ、最後に「究極的な偶然を必然として受け入れる。それが、偏狭なナショナリズムを超えるきっかけになると思うんです」と付け加えた。

Q　ナショナリズムの本質を暴くという遠大な作業の終点として、「愛」というきわめて人間的な心情に、偏狭なナショナリズムを超えるキャスティングボートを握らせているところが、何とも言えない余韻を漂わしているように思えましたね。

I　これは、ナショナリズムの本質を見据えた上でのクリシュナムルティの「愛」への姿勢と通底しているように思えてなりません。なぜなら、自由と平和の尊さを解くクリシュナムルティにとってもナショナリズムの問題は、避けて通れないものであったことは、次の彼の言葉から十分窺い知ることができるからです。

ナショナリズムの全面的打倒と世界国家の終局的創建こそは、平和実現の唯一の道と思われる。関税の障壁、人種的プライド、権力や支配への飽くなき欲望に塗り固められたナショナリズムの壁のなかでは、平和はありえない。高僧のかわりに独裁者たちが君臨し、儀式にかわって軍事パレードがとりおこなわれるナショナリズムが、いまや新しい世界宗教になったのだ。（『クリシュナムルティの世界』大野純一編訳）

これは、一九三九年四月十七日、アデレード（オーストラリア）の「アドバタイザー Advertizer」誌に掲載された「J・クリシュナムルティ氏の見解――平和の前に立ちはだかるナショナリズム」という一文の冒頭でクリシュナムルティが述べたものです。

Q　「愛」をめぐる考察が「ナショナリズム」というモンスターの中へ浸透して行った末にどのような世界が拓かれてくるか、いずれにしても大澤氏の本の帯に大書された「人類最後の難問　ナショナリズム」が重くのしかかってきますね。